

第一話「宅急便のはじまり」

大学生になって、一人暮らし。家族や地元とも、離ればなれ。

都会の生活は、毎日が自由で刺激的。

でもそのぶん、どこか自分を見失いがちだ。

楽しさや忙しさからはなれて、ふっと我にかえると
がらんとした部屋、たまった洗濯、すかすかの冷蔵庫。

あれ、風邪ひいたかも。でも、ひとりだなあ……。

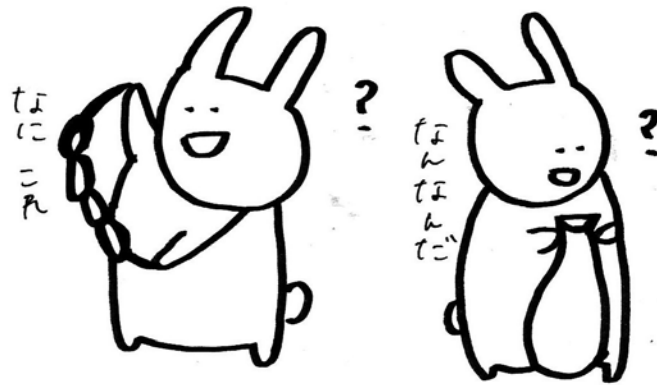


そんな最中、一人ぼっちの部屋に響く「ピンポーン！」

あ……！宅急便だ！

田舎から届いた小包みの箱。開けると、家の懐かしいにおい。

「なんで欲しかったのわかるんだろう？」と思うものから、
時には「これは一体、何なんだ？」というものまで詰まっている。



そうやって、じわじわとあたたかさを感じながら、
箱の中身にしっかりと、生活を助けられているのだ。



そんな仕送りを受けるすべての学生に質問。

「ちゃんとお返しできていますか？」

家族だから、身内だから、貰うことがあたりまえ。

「ありがとう」って思っはいるけど、

あらためて言うのも照れくさい。

その気持ち、実はとてもかんたんに伝えられる。

ずばり、お返しの宅急便を送るのだ。

学生二人がおばあちゃんに宅急便を届けます。

さあ、「孫の宅急便」のはじまり！

【歌う女子大生 岸優希さん】

岸さんは島根生まれ、島根育ちの大学2年生。

いまは神奈川にある大学に通っている。

いちばん楽しいのは、アカベラサークルで歌うこと。

そんな岸さんのところには、島根のおばあちゃんから

毎月宅急便が届くのだそう。



ではさっそく、中身を拝見！



奥にはみかんや出雲ぜんざいなど……島根の名産がいっぱい！

おばあちゃんはこのように郷土産物を入れて
島根をいっぱいアピールしてくるのだそうだ。

岸「一番すごかったのは、夏に送られてきた島根ぶどう。
箱いっぱいにデラウェアがたくさん入ってて、びっくりした！

サークルの友達と山分けして食べました。」

うらやましい。友達と囲んでたべたら、
よけいおいしく感じそうですね。

岸「そうですね。
みんなが島根に行きたい！って言ってくれて。
いつも田舎、田舎とバカにされるので（笑）
それが嬉しかったです。」

たしかに、この中身を見ると島根に行ってみたくなる！

ずばり、おばあちゃんからの宅急便は
岸さんにとってどんなものでしょうか。

岸「愛を感じさせてくれるもの。
とにかく、たくさん詰まっているじゃないですか。
箱の中身の整理されてない感じがいかにもうちのばあばで（笑）。

島根への愛や、家族への愛や、祖母への愛。
大学で授業やサークルが充実していて幸せ。

そんな幸せがあるのも、愛し愛される支えがあるからだと思って。

なんか臭くなっちゃったんですけど（笑）。」



いえいえ、そんなことはないです。

おばあちゃんからの宅急便は
岸さんのいそがしい混沌とした日々の中で、
ふと自分の出発点である家族やふるさを思い出す
きっかけになっているんですね。

【魅惑のシャイボーイ 西田将之くん】

西田くんは、名古屋生まれの大学3年生。

漫画が大好きで、将来の夢は少年ジャンプの編集長。

おばあちゃんから3ヶ月に1回くらい、宅急便が届くのだそう。



おばあちゃんはどんな贈り物を届けてくれるのでしょうか。



これはなんでしょうか。

西田「チャイレです。」

チャイレ、ですか？

西田「はい、抹茶を入れる壺です。」

なるほど、「茶入れ」ですか。

ずいぶんと渋いものを送ってくれるんですね。

西田「自分が茶道をやってるので。」

だから送ってくれたんです。」

さすが、おばあちゃんは西田さんのことを
よく考えてくれているんですね。

西田「ぼくのおばあちゃんは画商をやっていて、
日本中を飛び回っています。
だから、全国各地を回るたびに
いろんなものを送ってくれるんです。」

すごい、活発！画商をなさっているってことは
きっと西田さんのおばあちゃん、おしゃれな方なんですね。

西田「そうですね、服とかも送ってくれますよ。」

いいなあ。趣味が合わないことはないんでしょうか？

西田「大丈夫ですよー。

ぼく、基本的に着るものには無頓着なんで（笑）」

でも今日のシャツかわいいです。

西田「そうですかー。これも祖母からもらいました。」

うん。よく似合ってる。

そんな、孫のことを考えて送ってくれる
おしゃれなグッズたっぷりの宅急便は
西田さんにとってどんな存在なのでしょう。

西田「特に意味なんてありませんよ（照）」

そんな…。西田さん、恥ずかしがりなんですね。

感謝のきもち、伝えたいがあります！

第二話「おばあちゃんとわたし」

さて、お返しのプレゼント選びです。

岸さんは、どんなものを
おばあちゃんにあげましょう？

岸：「そうですね。如何せん、うちのばあばは
他人の幸せばかり考えてるんですよ。
趣味も娯楽も特になんないって言いますし。
昔の話を聞くとかなり壮絶で、

戦時中ばあばは満州にいたんです。
死に物狂いで日本に帰国して、終戦後お嫁にいったあとも、
毎日姑さんの召使のように家事をこなして。
農家なので畑仕事と、4人の子どもの子育て。
あとは、じいじのマネージャーのようなことも。」

私たちの世代のおばあちゃん、おじいちゃんは
大変な時代を生きてきてくれたんですね。
ところで、岸さんのおじいちゃんは何をなさっているんですか？

岸「祖父は華道家なんです。
日本や海外を飛び回って、お花を教えています。
だから、空港の送り迎えや荷物の準備、宿泊先の手配など
今でも祖母が、マネジメントをすべてやっていますね。」

それはいそがしい…。おばあちゃんはお元気ですね！
でもひとりでなんて、聞いていると少し心配。

岸「そう。だから、ほっと一息つける、
癒しグッズをあげたいですね。からだを労ってほしいです。
あと、島根は雪も積って寒いから、
防寒グッズもあげたいなあ！」

いいですね。
イメージはバッチリ！

さてさて、西田くんはどうでしょう。

西田「おばあちゃんはおしゃれだし、

基本的になんでも自分で選びたいひとだから

送っても使ってくれないかも…。」

西田くん、なんだか不安そう。

どうする、シャイボーイ？

西田「おばあちゃんには何かしてあげたいというよりも、

ちゃんと勉強してるアピールがしたい。

なんやかんや支援してもらってるから。」

ふむふむ。どうやって

「勉強してるアピール」を執行するんでしょう。

西田「実は、僕のおばあちゃんも慶應なんです。」

え！私たちの先輩なんですね。

岸さんのおばあちゃんといい、

カリスマおばあちゃんですね……。

西田「まあ、だから学校に行ったらヒントがあるかも。」

ええええ！（取材者、驚きをかくせません。）

なんだか行き当たりばつたりの感じがしますが…（笑）

ま、本人に任せるとしましょう。

こうしてみると、男の子と女の子の差が著しい（笑）

西田くん、大丈夫かな？

何はともあれ、お買いものが楽しみです。

第三話「プレゼントを探しにいこう！（岸さん編）」

さあ、おばあちゃんにあげる
プレゼントを探しにいきましょう。
いつも自分のことを考えて、
いろんなものを送ってくれるおばあちゃん。
愛情あふれる品々にまけないくらいに喜ぶものを、
岸さんも真剣に考えていました。

岸「何が欲しいんだろう…（笑）」

友達でも親でも子でもなく、

おばあちゃんって案外むずかしいかもしれません。



彼女が探しにきたのは、横浜駅。

クリスマス間近のこの日は人であふれ返っています。



岸「まずはロクシタンに行きましょう。」

いいですね。しかし、なぜロクシタンなの？

岸「おばあちゃん、畑仕事しているから、
手先とかからだをケアできるものをあげたいんです。」

なるほど、なるほど。



12月半ばということもあり、
クリスマスギフトでお店はさらに華やか。
中は、薔薇の花の香りでいっぱいでした。
人混みもないし、いい香りで心も和らぐな…、
と取材人が思っていましたら、

岸「ねえねえ、10秒に1本ってすごい！」



テレビ通販をみているおばちゃんみたいです。

岸「いい香り〜……。」

岸さん、エネルギーにあふれています。

岸「でもちょっとおばあちゃんには
この香りはきつすぎるなあ。とりあえず保留！」

次にまいりましょう。

続いて向かったのは、横浜ルミネ。

岸「あったかそうだなあ。
これ、おばあちゃん羽織ってくれるかな。」



手にしたのはウールのストール。
たしかに羽織ることも膝掛けにすることもできるし、
出かけるときや座っているとき、いろいろと使えそうです。

岸「かわいいなあ……、これ。」



岸さん曰く「おばあちゃんより自分に似合う」のだそう（笑）
そこから自分の買い物スイッチが入ったのか、しばらく色々試している岸さん。



岸「うーん、捨てがたいけど、保留！」
そうですね、ほかもいろいろ見てみましょう。

ルミネを上がり到着。



ここもまた学生には、ちょっと憧れのお店ですね。

のぞいてみましょう。

岸「あっこれ、良さそう！」

これまた綺麗な色のストールを、
彼女はお店に入って3歩で見つけました。

そうです。

買い物をして1時間弱たった今、彼女の
”おばあちゃんアンテナ”はとっっても研ぎすまされてきました。

岸「この色、おばあちゃんにすごい似合うと思うなあ。」

きれいな赤みをふくんだ紫色。
しかもさっきのストールよりも大きな布で、
肌触りもなめらかでとっともぎもちいい。

岸「これに決めました！」



うーん、すてきなプレゼントをみつけられました。

お店をでて歩いていると、通路に開けた化粧品のお店がありました。



岸「柚子とびわ葉のハンドクリームだって！」



そしてまた、嗅ぐ。

まぬけな図ですが、彼女はいたってまじめ。

岸「いい香りだなあ。付け心地もいいし。」



彼女の言うとおり、鼻にすっと入る柚子と、
おいしそうなびわのほんのりといい香り。
つけた後もさらさら。これを付けたら
おばあちゃんもほっと一息つけるのではないのでしょうか。

岸「これもあげようとおもいます！」

そして、おばあちゃんにあげるためのアルバム選び。



たくさん色や柄があって、うれしいけど困りますね。

岸「ピンクかな～。シンプルに白かな～。

チェックもかわいいかな～」



ここだけの話、アルバム選びに
いちばん時間がかかりました (笑)
やっとで決めた色はピンク。
明るくてかわいい色のほうが嬉しい、とのこと。

岸「ん〜、いい買い物した！」

人のために選ぶって、ずっと相手のことが頭の中にあるから
選んでいるあいだもしあわせになりますね。
さて、それでは帰って、箱に詰めましょう！

第四話「手紙を書こう、箱に詰めよう」

箱詰めの前、だいな作業。

おばあちゃんにあげるアルバム作りです。

[アルバム作り最中の写真]

岸「どんな学生生活を送っているのか、どんな友達がいるのか、

おばあちゃんには全然想像つかないと思うんですよ。

簡単に遊びにこられる距離じゃないし。

だからちょっとでも、私がどんな毎日を過ごしているか

イメージしてもらいたいんです。」

岸さんは自分の写真をいっぱい持ってきてくれました。

横浜で迷いに迷って選んだ、

きれいなピンク色のアルバムにいざ貼っていきましょう。

岸「歌っている写真や、イベントの写真、

ふだんの学校での写真、いろんな写真を貼って

それぞれの写真にコメントを書きました！

これなら、ばあばにも楽しんでもらえそう。」



よし！特製ポートフォリオの完成です。
これで、プレゼントは全部揃いましたね！

おっと。最後に、忘れてはいけないのがお手紙。
日ごろの感謝はやっぱり言葉で伝えたいものです。



ひとつひとつ言葉をえらんで、
何度も下書きをしていました。

ばあばへ。

冬も深まり、そちらの方は大雪だったようだけど、

元気にしていますか。風邪引いてない？

わたしは湘南台で元気にやっています。

急に宅急便送ったりしてびっくりしたでしょう。

実は、毎月のようにお米やお菓子を贈ってくれる

ばあばにお返しをしないとずっと思っていました。

やっと、実現したよ！

横浜で見つけたプレゼントたち、どうですか？

サークル活動や授業で忙しくて

電話もなかなか出られなくてごめんね。

電話をかけなおしてばあばの声を聞くと、いつも

ホッとするよ。ありがとう。

いま、わたしは大好きな友達に囲まれて、愛おしい

家族に支えられて、本当に幸せです。

どんなときもわたしのことを分かってくれる大切な

大切なばあば。

離れてても繋がっていると、自信持って言えます。

将来必ず孝行するから、長生きしてね。

では、からだに気をつけて。

じいじにもよろしくね。

春休みに会いにいきます。

優希より。

岸さんのおばあちゃんへの愛情、

しっかりと伝わってきます。

これは、おばあちゃんがもらったら
なによりも一番うれしいものかもしれないですね。

ぜんぶ箱に詰めて……



完成です。



郵便局着きました。



岸さんの箱、ぶじ届きますように。

第五話「プレゼントを探しにいこう（西田くん編）」

西田さんは、集合場所にあてての学校をセレクト。

現れた西田さんはなんだか眠そうです。

男の子の1人暮らし、大変そう。

西田「掃除とか洗濯とかいろいろありますよねえ…。」

ですよねえ…。集合場所を学校にしたのはどうして？

西田「ぼくもおばあちゃんも慶應だから。

僕もおばあちゃんと同じ学校で

勉強がんばってること示したいと思って。」

ああ、前回も言っていた

「勉強がんばってるアピール」ですね！

学校でプレゼントを買うとなると、場所は限られています。

ということは？

西田「はい、生協に参りましょう！」

迷わず生協に向かう西田さん。どうなるのでしょうか。

[選んでる写真]

西田「慶應グッズいいなあ！」

やっぱり、そうですか。

西田「慶應の人は慶應が好き。

このマグカップとかけっこういいじゃん。」

うーん、そうでしょうか。

でも生協の意外なクオリティの高さには驚き！

タオルやリストバンドも物色しています。

西田さん、慶應グッズ一色で攻めるの？

西田「そうですね。」

[どや顔の西田写真]

さすがやり手画商の孫です。

迷いはないらしい。潔く選びます。

西田さんは学校の生協の慶應グッズコーナーで

- ・ 慶應お箸
- ・ 慶應リストバンド
- ・ 慶應タオル
- ・ 慶應湯のみ

以上4点をおばあちゃんのために購入しました。

西田：「慶應ずくし！いいんじゃないですか？」

西田さんが満足そうなのでOKです（笑）

西田：「よし、ちょっと腹ごしらえしましょう。」

え？向かった先はSUBWAYです。

[西田サブウェイ食べる写真]

西田さん、自由だなあ（笑）

まだ箱詰めと発送が残っていますよ！

[西田サブウェイ食べる写真]

西田「がんばりましょう。」

はい（笑）

第六話「え、そのまま出すの！？（西田さん編）」

自宅に戻った西田さん。

西田「すみません。なんか散らかってて。」

いえいえ、自由な西田さんらしくていいと思います。
もう西田さんのペースにすべてをゆだねることにしました。

とりあえず、西田さんは送るものを並べます。

(送るものの写真)

するとおもむろに値札をはがし始めました。

まめですね、西田さん。

そんなところで、箱詰めを始めましょうか。

西田「あ…。」

なにごとでしょう。

西田「このままだと中にスペースがありすぎて

マグカップが割れちゃうかも。

ガムテープで箱の角にくっつけますね。」

たしかに、かしこいです。

ずぼらそうに見えて、意外と小さなことにも気づくんですね。

またまたまめな、西田さん。

あれ、もう箱詰め完了？

お手紙とかは書かないんですか？

西田「あ、ぼくは手紙とか書かないので。」

どうして？

西田「恥ずかしいからです。」

想定範囲内の、単純明快な理由（笑）
結局、慶應グッズの詰め合わせセットになりました。

西田さんが心地よく送り出せる宅急便であれば
こちらはなんだって大丈夫です。
ここで何かを強制しても、おばあちゃんに何も伝わりません。
大切なのは、本人たちのやりたいとおりにすること。

[箱詰めするプレゼントの写真]

さあ、郵便局に行きましょう。

おばあちゃんに届くよう、宛名ラベルに記入します。

西田「あ…。」

今度は何ですか。

西田「おばあちゃんの住所知らない。」

それは困ります！
至急、電話して調べてください！

西田「もしもし。」

おばあちゃん「もしもし。」

西田「ちょっと住所教えてもらってもいい？」

おばあちゃん「いいけど、突然どうしたの？」

西田「ちょっと知り合いの頼みで宅急便送ることになって。」

おばあちゃん「ふうん。そうなの。住所は○×△-□□×○…」

西田「オッケー。ありがとう。じゃあまたね。」

おばあちゃん「良く分からないけど、まあいいや。

宅急便待つてまーす。」

クールなおばあちゃんと、シャイな西田くん。

会話はシンプルで、関係性が表れています。

住所はしっかりメモできました。

それにしても、「知り合いの頼み」って！

西田「そこらへんは素直になれない感じですね。

そもそもプレゼントを送るという行為自体

相当、奇跡的なんですよー！」

西田くんを良く知るおばあちゃんなら

きっとその奇跡に感動してくれるはず。

そんな奇跡の宅急便を郵便局の方に手渡して、発送完了です！

[写真いれるー]

第七話 「おばあちゃんの声」

無事に発送が済むと、岸さんはそわそわ、
なんだか落ち着きがありません。

岸「大丈夫かな？気に入ってもらえるかな……。

ばあばは恥ずかしがり屋だし、
人にこういうことされるの慣れてないから、
反応してくれなかったりして……。」

緊張しますね。

人になにかを伝えることって、相手が大切な人ほど
それとおなじくらいの勇気がいります。

でもきっと、大丈夫。

岸さんの思いがこもった箱が無事に島根に着きますように！



そして数日後、お荷物お届けの通知が岸さんに届き、
なんとその日に、おばあちゃんから電話が。

岸「もしもし？ばあば？荷物届いた？」

ばあば「本日はどうも、すてきな贈りものをいただきまして……。」

おばあちゃんはちょっとおどけているようです。

岸「たいしたものじゃなかったけど……。」

ばあば「少ないお小遣いで大変だろうに、ごめんねえ。」

岸「大丈夫だよ～！それより、いつもありがとう！」

ばあば「ちょっとおじいさんに換わるけん。」

おばあちゃんは照れくさいのか、
もうおじいちゃんに電話を換わってしまいました。

じいじ「もしもしー！」

岸「もしもしー！」

じいじ「今日はおばあさんにプレゼントをありがとう。」

岸「いえいえ。」

じいじ：「おばあさん、すごく喜んどったよ。ありがとうね。」

照れてすぐさま引っ込んでしまったおばあちゃんの代わりに、
おじいちゃんがお礼を言ってくれました。

岸「うん。良かったー！」

じいじ「春休み、島根に帰って来れそうだあ？」

岸「絶対帰るよー！」

じいじ「待っとるけんね。」

岸「うん。からだに気をつけてね。」

じいじ「ありがとう。じゃあ、おばあさんに戻すよ。」

受話器の向こうで二電話を換わる、換わらない、
という二人の小競り合いが聞こえます（笑）



しばし待つと、おばあちゃんが再び受話器のもとへ。

ばあば「じゃあ、またお米やらお餅やら送るけんね。」

岸「うん。ありがとう！」

ばあば「じゃあね。ありがとう。」

岸「またね。」

そうして、おばあちゃんとの電話は終了。
短い会話だったけど、十分伝わったのでしょう。
岸さんはとても満足そうです。

岸「口下手なばあばが愛おしいなあ。

言葉にできないばあばのために
ちゃんと感謝を伝えてくれたじいじも素敵。

早く会っていっぱい話がしたいです！

とにかく会いたくなった！」

いつも思っている感謝を伝えられたことが、
おばあちゃんとおじいちゃんのありがたみを
実感することにもつながったようです。

自分の環境、感じること、周りの人すべてが、
いつまでもつづくものではありません。
だから、大切だと感じるができるし、
だから、今、伝えることがあるのです。

一人暮らしをする学生たちは、宅急便に込められた、
たくさんの愛情に受け取っているでしょう。

大切なひとへ、宅急便のお返しを。
きっと、たくさんの驚きや笑顔が生まれるはずです。

